HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一部　通史.　第四編　キャンパスの変遷.　第八章　札幌キャンパスの地形と遺跡
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 306-312
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28170
Type	bulletin (article)
File Information	4(8)_306.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第八章　札幌キャンパスの地形と遺跡

第一節　札幌キャンパス・ナビゲーター

正門をくぐる。ものの四、五〇メートルも進まないうちに道路の両側には小川が流れる緑の窪地が現れてくる。ハルニレやシダレヤナギの高木が陰をおとす芝の生い茂る緑地、ここ中央ローンは訪れる人たちに北海道大学のキャンパスの広大さと自然の豊かさを印象づけずにはおかないだろう。登録文化財の古河講堂を右手に見て、クラーク像のある交差点（ロータリー）まで進むと、正面には古式ゆかしいたたずまいの農学部校舎が現れる。そこで立ち止まり右側を向くと、遙か北へと中央道路が一直線に延びている。ただただ広くて平らである。

中央道路を北上しよう。道路の左手に一九二九年に建築された旧理学部校舎がすぐに目にとまる。現在は総合博物館としてリニューアルされている。道路に面した向かい側には「人文・社会科学総合教育研究棟」（以下、ＢＳＫと略）、二〇〇三年春に完成したばかりで北大の歴史を語るには不向きなほど真新しい建物である。問題はその場所、その地下であるが、それについては後にふれよう。中央道路をさらに数十メートルほど北に進むと、一昨年までは道路の西側に沿ってポプラ並木があった。早とちりの修学旅行生が、第一農場のポプラ並木と勘違いして写真におさめた通称「偽ポプラ並木」である。近年、倒木の危険性が指摘され、安全対策と自然保護との葛藤の末に、伐採されてしまったことも記憶に新しい。そこを過ぎると、平坦とばかり思っていた道路の両側の景色が一変する。右手にはこんもりとした林が東側へと細長く広がり、谷間の小道のよそおいでその林間を縫って構内でも珍しくなった土の小道が弓道場の脇をかすめて続いている。道路の左手には大野池。周囲よりも一段低く、その奥には湿

地の植物が繁茂する。どこから流れ込むのか水音が絶えないが、これは水流循環式のハイテク土木工事。それでも水鳥は憩い、学生たちの勉学に疲れた眼を休ませてくれる。

多少起伏を感じられた地形もそこまでで、中央道路をさらに北上すると左手に工学部、右手に歯学部、医学部と再び平らになったキャンパスが続く。クラーク像から約一〇〇〇メートル強、やがて中央道路の北端にいたると全学教育科目の授業が展開される高等教育機能開発総合センターがあらわれる。その少し手前で道路を左手に折れ、言語文化部の裏手にまわり、細くなった道路をさらに西へと進むと、ヤチダモやイタヤカエデなどの自生植物が繁茂する通称「原生林」へと踏み込むことになる。そこには「旧恵迪寮跡地之碑」が建てられている。その原生林の尽きるところ、北西の一角、遺跡保存庭園へとたどりつく。周囲はフェンスで囲われ、水流の無い細長い湿地がその西縁を画している。内部にはハンノキやヤチダモなどがまばらに生え、生い茂った下草の間には、眼を凝らすと直径数メートル程の窪みが所々に見えてくる。その窪みこそは「擦文文化」の終わりの頃、約七〇〇～八〇〇年前に残された竪穴住居の跡が埋まりきらずに今日まで至ったものである。遺跡保存庭園のさらに西隣には運動場と恵迪寮があり、やっとキャンパスの西外れとなる。この恵迪寮舎は一九八三年に建築された比較的新しい建物である。やはり問題はその場所、その地下であるが、それも後でふれよう。

正門をくぐってから約二〇分、札幌キャンパスを斜めに横切って歩いてきたわけだが、すでにお気づきのように空間だけを移動したのではなくて、実は時間的にも一〇〇〇年、二〇〇〇年の人類の時間を少しばかり遡ってきたのだ。最初はただただ広く平坦に見えただけのキャンパスの地形も、多少起伏を残したところがあり、また自生植物が見られたところもあった。生活の便のために平坦に均された地面、それを覆い尽くすアスファルトとコンクリート。その下には今なお何かが埋まっている。アスファルトの隙間から、記録として文字に残されなかった人類の時間を再構成する仕事、それが考古学の研究であり、埋蔵文化財行政である。北海道大学では一九八〇年に埋蔵文化

財調査室が開設され、二〇〇〇年以降は施設・環境委員会施設計画専門委員会の下に位置づけられ、現在、キャンパス内の埋蔵文化財の緊急発掘調査を一手に引き受けている。ここに紹介する考古学の成果もその一端である。

第二節　地形と遺跡

札幌キャンパスは、豊平川が形成した扇状地の末端付近に広がる沖積地に位置している。扇状地の地下をくぐってきた伏流水はその末端付近で地上に湧き出し、幾筋かの川の流れをつくっている。現在はそのほとんどが埋め立てられて跡形もない状態だが、札幌キャンパス内にもかつてサクシュコトニ川とセロンペツ川という二筋の川の流れがあった。前節で紹介したキャンパス内の多少起伏した地形、すなわち中央ローンの緑なす窪地、林間の弓道場脇の小道、それに続く大野池、そして遺跡保存庭園内の細長い湿地。道路や高層階の建物に寸断されているが、これらをつなぐと蛇行する一筋の谷地形が現れることに気づくだろう。これがサクシュコトニ川の跡である（現在、「エコ・キャンパス推進基本計画」の一環として「サクシュコトニ川再生工事」が進められている）。またキャンパスの西側には第一農場が広がるが、そこにも緩やかな起伏が認められる。セロンペツ川の痕跡である。「清華亭」（旧偕楽園、北区北七条西七丁目）付近や農学部附属植物園内の湧水地を水源とするこれらの二筋の小河川はキャンパスの東西両側を蛇行しながら北上し、恵迪寮の北側付近で合流し、さらに幾筋かの小河川とも合流しながら第二農場をかすめて北へ向かって流れてゆく。現在はこれらを総称して「旧琴似川」と呼んでいる。

明治年間、土地の改変が未だ進んでいなかった明治二〇年代、札幌史学会の会員であった高畑宜一は旧琴似川の両岸に点在した直径数メートル程の窪みの位置を地図上に正確に記録した。その数七二〇個所に及ぶ。これらの窪みのほとんどすべては埋まりかけた擦文文化の竪穴住居の跡である。川岸には竪穴住居址の窪みが群集する区域を

いくつか確認できるが、先述したキャンパス内の遺跡保存庭園はまさにそのうちの一つなのである。現在、この場所を除いては地表面でこのような窪みを見つけることはできない。

札幌キャンパス内の遺跡は遺跡保存庭園だけではない。実はキャンパスのほぼ全域が遺跡に指定されている。おおよそ獣医学部よりも南がK39遺跡に該当し、第二農場付近がK435遺跡となる。だからといって、その全域に土器や住居址などの埋蔵文化財が連綿と包蔵されているわけではない。むしろそのような包蔵地点が島状に散在しながらひろがっている状態である。キャンパス内で地面の下を掘削するような工事が実施される場合は、工事の規模の大小にかかわらず、それらに先立って埋蔵文化財（遺物や遺構）の包蔵の有無や程度を確かめるための試掘調査が行われる。埋蔵文化財の存在が確認されると、その地点はKナンバーの遺跡名に続いてさらに地点名を付して、その場所の表示がなされる（例えば、「K39遺跡西門地点」）。このように、キャンパス内では個々の地点で遺物や遺構が発見されてはじめて、そこが今日的な用語法での「遺跡」に相当するものとなる。すなわちK39遺跡やK435遺跡とは、本来「遺跡群」に対応する内容のものであると理解してよい。

「パリの地下にはもうひとつのパリがある…」、V・ユゴー著『レ・ミゼラブル』のなかの有名な一節である。「もうひとつのパリ」とはもちろん下水道のことである。札幌キャンパスの地下には一つどころか二つの地底世界がある。下水道ではないことはいうまでもない。K39「遺跡群」とK435「遺跡群」はともに、おおよそ一〇〇〇年前の前後数百年間の擦文文化の遺跡と、約二〇〇〇年前以降の数百年間の続縄文文化の遺跡とが重複している遺跡群である。場所によって多少異なるが、前者は現地表下一～二メートルの深さにあり、後者は現地表下二～三メートルの深さに埋没している。二つの地底世界とはこれらのことである。

第三節　二つの地底世界――擦文文化と続縄文文化――

地表面のアスファルトを剥ぎ取ると、その下には五〇センチメートルから一メートルの厚さで客土と瓦礫が埋まっている。キャンパスの見た目の平坦さはこれによってつくられているのである。場所によってはその下に二、三〇センチメートル程の黒色土が堆積しているが、それが自然の旧表土（腐植土）である。大半のところではすでに削平されてなくなっており、今やその存在は貴重である。札幌キャンパスの地に足を踏み入れた開拓期のパイオニアはその土の上に立ったのである。さらにそれを掘り下げると地下一～二メートルの間に、何枚もの橙褐色の砂とシルトの互層が続く。その中にやや黒味を帯びた土層が二～三枚ほど挟まるが、それが擦文文化の文化層、すなわち当時の生活面である。そこからは竈を造り付けた隅丸方形の竪穴住居址が発見される。当時、すでに扇状地の末端付近では沖積地の形成がかなり進んでおり、サクシュコトニ川の流路は今日確認できる位置に徐々に安定し、川岸に形成された自然堤防上は定住集落が形成できるほどに高燥化してきた状態であった。

この間、本州では古墳文化から律令国家へと歴史的な展開が遂げられている。粗密はありながらも北海道域のほぼ全域にわたって展開した擦文文化は、本州の古墳文化や律令体制下の土師式土器文化との接触・交流を経て、石狩苫小牧低地帯から形成され始めたと考えられている。竈の採用、住居構造の変化、鉄器の普及や狩猟漁撈採集といった直接生産に加えて、畑作農耕といった管理生産も取り込んだ食料生産体系を特長とする生活様式の確立である。

擦文文化の遺跡はキャンパス内のサクシュコトニ川周辺の各所で発見されているが、これまでに発掘調査した最大級の一つは、サクシュコトニ川とセロンペツ川との合流点近くのK39遺跡恵廸寮地点である。擦文文化の二枚の文化層が確認され、そのうちの一つ「第2文化層」は集落址であった。また埋没していた旧河道では定置漁具で

ある鰓状の施設も発見され注目された。

この擦文文化の文化層をさらに一メートル程掘り下げると、シルトと粘土が互層をなすようになる。現地表面からは二〜三メートルの深度である。この地層は札幌キャンパスの地下全域に存在するものであり、当時、この一帯はかなり水漬きの湿地であったことがわかる。しかし、その中から続縄文文化の生活痕跡が発見されるのである。おそらくは沼沢地とそこを網の目状に流れる小河川、湿地帯に島状の高まりとして現れた小河川脇の自然堤防、そのような地理的な環境が札幌キャンパス周辺に出現したのであろう。春には雪解けの大水で湿地帯の大半は冠水し、やがてまた新たな流路ができ、自然堤防が更新されてゆく。このような繰り返しの中で、続縄文文化の人たちは、自然堤防上での季節的な活動を展開していったのではないだろうか。サクシュコトニ川の上流部にあたるK39遺跡BSK地点では、縄文晩期の最終末から続縄文文化の初頭の文化層で季節的な漁撈活動を行った諸施設が発見された。その場所はその後何度かの洪水堆積で高燥化した結果、上層の文化層である続縄文文化前葉の時期には墓地を伴った本格的な定住集落が形成されることになる。やがてその集落も何度かの大洪水で埋没することになるが、このような過程を経て擦文文化が展開する土地的な条件が整えられてゆくのである。

この間、本州では縄文文化の最終末から水稲耕作が本格化した弥生文化へ、そして軍事的な統一へ傾倒する古墳文化へと歴史的な展開を遂げてゆく。これまで日本史の第一章として語られてきた内容は実はこのようなものであった。またこの同じ内容は、「食料獲得」から「食料生産」へ、そして階級社会の形成から古代国家の成立へ、といったように日本列島で展開した人類史の一齣として語られることもあった。しかし南西諸島でもそうだが、ここに紹介してきたように北海道域での人類活動の展開は、そのような定式的な理解に納まるものではない。現在、考古学ではこのような人類史の再構成の試みが始められている。

札幌キャンパスでは二一世紀の新たな発展を目指して、ハイテク装備の新しい建物の建設が、またそれに付帯し

た大小様々な配管工事などが、休むことなく日々実施され、大地は削られている。その際には必ず北海道大学埋蔵文化財調査室で工事地点における遺跡の存否の確認調査を行っている。そして遺跡は発掘調査され、破壊されることになる。開発工事と埋蔵文化財の調査と葛藤は、なにも札幌キャンパスに限られたことではなく現代文明の都市が直面している緊急の問題である。これからも継続する埋蔵文化財調査室を中心とした北海道大学でのその取り組みが、都市における埋蔵文化財の調査・保存・活用の実践モデルになることを願っている。